

寺島珠雄書誌目録刊行会会報

第二号

二〇一二年二月二十五日発行 発行人 中岡光次 編集人 前田年昭 連絡先 岡山県赤磐市沼田四六八一(〒七〇九一〇八二二)

寺島珠雄の著作物の収集と公開について

刊行会は前号で趣旨をお伝えしたように、寺島珠雄の書誌目録の作成と併せて、著作物を収集し、必要とする人びとの利用に供したいと考えています。

具体的には、著書、掲載紙誌のすべてを

社会福祉法人大阪自彊館あいりん資料室(大阪市西成区萩之茶屋一―二―一五)に常備

し、必要な人びとの利用に供すること、あわせて永く保存されるためにもいくつかの公共図書館に寄贈することです。したがっ

「寺島の思想」などと言えば、故人はきつと「よせやい」と言うに決まっています。いくつかの書庫に行けば、求める人びとが寺島珠雄に出会えるようにしておきたいと思っています。

て、著書については最低二部以上を求めています。考えている寄贈先は少なくなく、重複本が増えても構わないのでお譲りいただける方のご連絡ください。

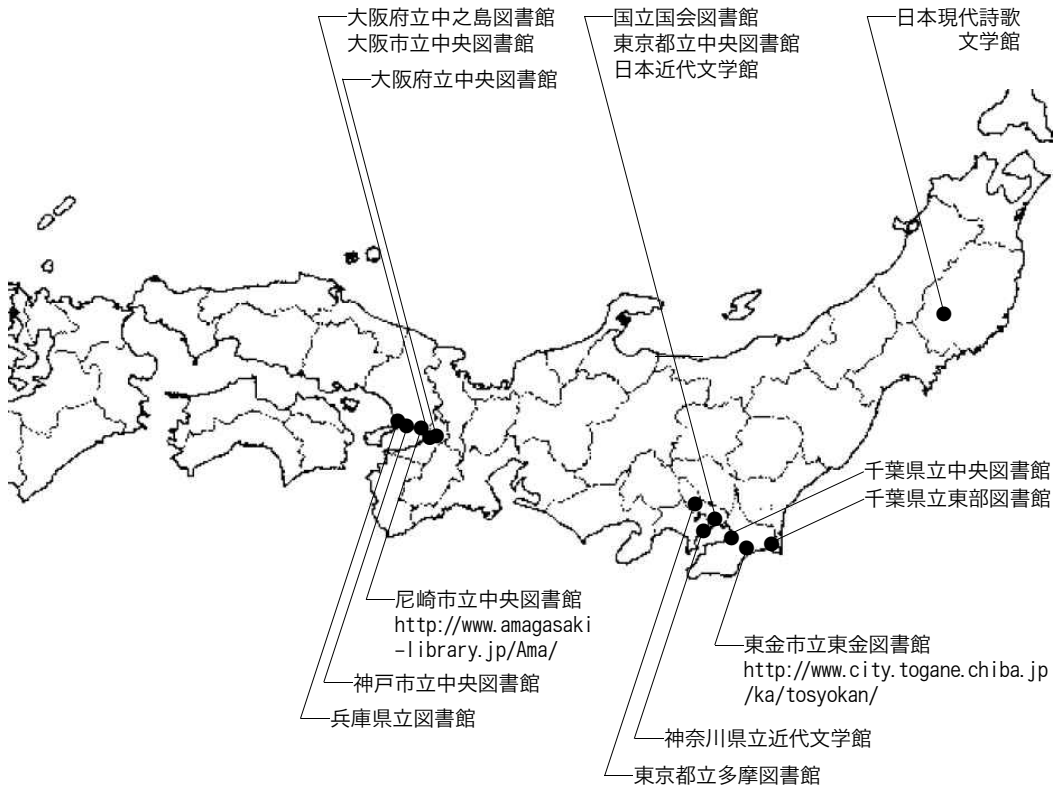
「文学館」ではどうかという声もあろうかと思えます。寺島珠雄が優れた詩人であったことは論をまたないと思いますが、彼は実に「多面体の漢」であり、文学的な側面に限ることでの多面的、人間的な魅力を見失いかねないという危惧もあります。また、「文学館」は庶民にとり敷居が高い。コピー代が高く、比較的安い日本現代詩歌文学館でも一枚三〇〇円、日本近代文学館は一枚一〇〇円(カラーは三〇〇円)に加えて入場料が毎回、取られます。図書館法で「入館料その他図書館資料の利用に対するいかなる対価をも徴収してはならない」と定められています。

速報!!

寺島珠雄の埋もれた
た労作未刊稿『釜ヶ崎語彙集(仮題)』来夏、
東京・新宿書房から
堂々発刊決定! 委細
次号にて発表!

私たちの目的は寺島珠雄の「顕彰」などではなく、記録し、保存することです。誰であれ故人の代理も代弁もできません。「顕彰」や況一覽をご参照ください。◎印は二冊蔵、

所蔵状況一覽 (2011年11月20日現在)



また寺島著書名の上の数字は【寺島珠雄書誌目録】(第一次)のC(本)部分のナンバーです。

寄贈先の図書館としてまず第一に、故郷である東金市立東金図書館(千葉県東金市東岩崎一―)を予定しています。悲しいかな蔵書は『どぶねずみの歌』一冊だけですが、貸し出し希望は絶えていません。こういうファンにこたえ、必要資料を拡充したいと考えています。その人物を探索するにはやはり故郷が大きな手がかりになるからです。利用頻度による除籍廃本措置などがなされないようお願いし、このほど嬉しいことに「郷土資料」としての保管が決定しました。

寄贈先として次に考えているのが、最後の住み処として長く暮らした尼崎市立中央図書館、都道府県立では最多の所蔵がある兵庫県立図書館、利便性の高い神戸市立中央図書館です。

尼崎市立中央所蔵の『わがテロル考』には「寺島珠雄氏寄贈」シールが貼られています。刊行は釜ヶ崎在住時ですから、尼崎に移り住んでから寄贈したものと思われまます。また、ここには寺島珠雄が最も長く交友を結んだ一人、日野善太郎関係の所蔵もあり、近くの尼崎地域史料室には「日野

主な図書館・文学館等における

		7	8	9	10	11	12	14	16	13	15	17	23	6	27	28	29	30	31	33	34	
		わがテロル考	情況と感傷	あとでみる地図	寺島珠雄詩集(編石野)	断景	酒食年表	酒食年表第一	酒食年表第三	神戸備忘記	片信録	遠景と近状	どぶねずみの歌	労務者渡世	私の大阪地図	旅の宿りの長いまち	小野十三郎ノート(2巻)	アノキズムのうちそとで	西山勇太郎ノート	小野十三郎ノート別冊	南天堂	
図書館	東金市立東金図書館												○									
	千葉県立中央図書館													○				○		○		
	千葉県立東部図書館												○		○							○
	尼崎市立中央図書館	○								○			○	○					○		○	
	神戸市立中央図書館		○	○			○	○		○			○								○	○
	兵庫県立図書館		○	○	○	○	○			○			○	○	○	○	○			○		○
	大阪市立中央図書館		○							○				○	○	○	○	○			○	○
	大阪府立中央図書館													○	◎	○	○	○	○	○	○	○
	大阪府立中之島図書館					○				○	○		○	○	◎	○	○	○	○		○	
	東京都立中央図書館													○				○		○	○	○
	東京都多摩図書館													○		○	○					○
	国立国会図書館						○	○			○		○	○	○	○	○	○	○			○
	文学館	日本近代文学館			○	○		○	○	○		○	○						○		○	○
神奈川県立近代文学館				○		○												○	○		○	○
日本現代詩歌文学館		○				○												○				
当会(あいらん資料館含む)		○	○	○	○	○	◎	○	◎				○	○		◎	○	◎				○

善太郎氏文書』も保管公開されています。

私たちが一年後に予定している『寺島珠雄書誌目録(完成版)』は当会「会報」合冊とともに、以上挙げた図書館、資料館、文学館などに配布寄贈します。

当会への寄贈、それは預託というべきかもしれませんが、特定施設への寄贈を希望される場合は遠慮なくご提案ください。お手元に死蔵されている寺島珠雄の著作物、著書、掲載紙誌)を活かすため、ぜひお譲りください。

〔中岡〕

当会(あいらん資料館含む)所蔵その他の本

『詩集 釜ヶ崎通信別冊・まだ生きている』
『日本反政治詩集』
『ストリップ昭和史』
『それで事は始まる』
『虚無思想研究(下)』
『詩集・阪神淡路大震災』第1集・第2集
『反逆頌 小松亀代吉追悼』
『資料・小野十三郎』1・2
『定本 小野十三郎全詩集』
『山谷・キューバ・フォーク』
『竹中芳 没後20年・反骨のルポライター』
『小沢昭一』河出2010/6
『月の輪古書目録十二 特集寺島珠雄私記』

お久しぶり寺島珠雄さん

長谷川修児

寺島さん元気ですか、ともよびかけた気持ちです。

寺島さんは向井孝さんとともに月報「遊撃」——がり版ピラ誌——の最良の読者でした。向井さんは物がきの一方、市民運動の達人で創意工夫に満ちた集会・デモを展開しピラ作りからそのま

きかたまで、ぼくは舌をまかされました。

寺島さんはぼくのなかではまづ釜ヶ崎、労務者、おにぎりというイメージであらわれてきました。そして文人という呼び名がふさわしい人です。また多岐にわたる丹念な資料追究力は寺島さんの書く文章のはしはしにふとかいまみることができます。詩においても同じです。

「服部之總は一時期、花王石鹸の宣伝部長だった。」週刊金曜日八七一号——佐高信のお墓紀行部分

という文をみたときぼくは寺島

さんの花王石鹸の詩を思い出し、そこに服部之總の登場する意味がはじめてとけたのでした。そういう謎めいた詩はほかにもあつて油断はならぬと今になつて思われるのです。

一九七三年十月に刊行された『反政治詩集』は寺島、向井の持ち味なくては生まれなかつた傑作でしょう。ぼくにはきびし

かつた菅原克己も「きみこの仕事はとてもいいよ」といつていました。

断片・寺島珠雄(2)

竹中労と三百円という稿料の差の話から

中岡光次

代にこのような詩集はふたたび必要とされているとぼくは考え

本さんへの追悼詩のあつかいにふれた部分です。ぼくは手紙、月報などの郵送にチラシ・包み紙などを裏返して封筒に使っているけれど、寺島さんのそれは本格的で郵便番号欄も自分で

作つた年譜原稿のしまいに設けた追悼の切抜集に貼つたところです。年譜は三万五千字ぐらいの量できています。近

岡本潤や小野十三郎の生涯とその著作を掘り起こしつづけるの死までみとけた寺島さんの執拗な熱情は文人寺島珠雄の真骨頂でありましょう。

し、略年譜ということになつてしましました。いつかなんとかしようと思つています。」

一九七八年五月二日付けの寺島さんからののがきの一部です。ぼくが「遊撃」にかいた岡

崩壊しはじめてい

二〇一一・一一・一四

● 必要があつた。

寺島珠雄が私の住まいに上がり込むことはめつたになかつたし玄関口で立ち話をするこ

なかつた。履物を脱いで上がり込む時は必ず何か大切な用件がある時だからこちらも身構える

と音がして、ドアを開けて呼び止めても背中を向けたまま片手であいさつして振り向きもしな

い。メモはメモであつて概略簡単なものばかりであつた。

今夜八時◎面白い男来る。◎

◎とは先号に書いた呑み屋八兵衛である。要請ではない。要請

であれば上がり込んでくるのである。来ればよし、来ざるも自由というところ。

面白い男とは一体誰であるかなどと考えながら店に入ると驚いた。この人テレビでみたことあるなあ、ああ竹中労だ。

中学生から高校一年にかけてわが家でみんな揃つて見るテレビ番組は二つあつた。「てなもんや三度笠」となぜか「全日本歌謡選手権」である。

「歌謡選手権」は鳴かず飛ばずのプロも含めて五週連続で勝ち上がればデビュー権が獲得できるといふものだった。審査員竹中のズバリ言い切る審査評を父が楽しみにしていて、子供にしてみれば別に見たい番組ではなかつたような気がする。五木ひろしが五木ひろしでなくて少し

変わった名前が出ていたが、途中の回から竹中の姿が審査員席から姿を消した。その時以降父にとつて「歌謡選手権」はどうでも良い番組になったようである。

その時の話を直接聞くことができた。プロダクションから五木を五回勝たせて欲しい、つまり工作依頼があつて、そういう話を耳に入れてしまった以上は審査員を辞めるしかなかつたという話だった。

聞く話する話どれも面白いものばかりであつたが、一体なぜ寺島がこの私を竹中労との同席に誘つたのかという疑問があつた。竹中はそう遠い昔ではない時代に山谷闘争に加わつていたことぐらいは知つている。しかし、当時は太田竜などと三馬鹿ゲバリストなどと雑誌『現代の眼』などでその筋の世論を賑わし、その論理は私にとつて論外であつたし、その人間がなぜ「歌謡選手権」の審査員であつたのか脈絡のつながらない不思議な

存在である。山谷闘争で都庁に乱入し共に逮捕された、船本洲治と鈴木国男の二人は釜ヶ崎でそれぞれ立ち位置を確保し積極的に活動していたことも含めて、釜ヶ崎における広範な情報提供可能者として私を竹中に紹介しておきたかつたのだろうか、と今は解釈している。

『現代の眼』に二人の話が移つたとき。竹中は寺島に問いを発した。

「寺さん、稿料はいくら貰つてんだ？」

寺島、少し困つたような顔をして、

「千二百円だけど、それがどうかして」

竹中の表情が困つたように陰しくなつた。

「おれは千五百円だ。そんなことでは俺の立場がない。編集部と話をする！」

「よせやい、俺はかまわない、気にもしない……」

「ママ、電話を貸してくれ」

竹中の猛爆が始まつた。最初は、二人の差額三百円の意味を説明しろ」でじんわりと切り出し、「兄気分の寺島珠雄より三百円も高い稿料を貰つている俺の立場をどうしてくれる」と話はやや脅迫めいてきて、電話の向こうで応対している人物が小さくなつて汗を拭き拭きしているのが眼に浮かんでしまう。

「規定が、だと。そんなものは変えればいいだけのものじゃねえか」

寺島珠雄はやはり困つたような顔をして、話が気になつて仕方ないようであつた。

猛爆の止む気配はなさそうだから私としては「寺さん、話を持たせておいて呑みましょ、呑みましょ」というしかない。

どうやら話は結論がでたようである。

「すまない、俺と同じ千五百円で辛抱してくれないか、それ以上はどうしても無理なようだ」「おれは最初から何も言つてないじゃないか」

寺島は少し不機嫌そうな顔をしていたので、一番年少の私としては、仲を取り持つことに気をつかう。寺島は私のことを良く「年寄り臭い」とからかったが、その責任の一部は彼にもあったのだ。

先号に西村修氏から懐かしい投稿を頂いた。その中に、『旅の宿りの長い町』に「酒場の一風景として私(N)やIが影絵になつて登場…」という部分があるが、この時が私と西村氏との初対面の場であつたとは、ここ二年ほど前に氏に教えられた話。もう四十年も前の話である「負ける」か「勝つ」という寺島対西村の論争で「Nがからみはじめて…いささかうるさいが面白くもあつた」一緒にいたIが、一番若いのに(若いから、か)しきりと調停を試みてくれたが、それも面白かつた」この一番若いIは当時岩田を名乗つていた私だが、どこにいても一番若く吞ませてもらうだけの存在であつた私としては気を使わざるをえず、酔いきれることもなかつたのである。年寄臭くもなろうというものだ。

しばらくして、寺島の部屋で竹中の感想を話したことがあつた。曰く「竹中労は気持ちが悪い」と。「どういうことだ」という寺島に「何か悪い病気をうつされそうな気がする」と追加したら寺島はころこんで喜んだのであつた。

「言つてやる、必ず伝えてやるから。あいつそういうのが一番好きなやつなんだ。喜ぶぞあいつ。」「だけど気を付けた方がいい。あいつに悪い病気をうつされて死んだやつもいるからなあ」「次は指名がかかるぞ。だけど危ないと思つたら遠慮なく俺に言つてくれ、必ず助けてやるから」

なるほどその後竹中からご指名がかかったが、それは想像もできなかったことからだつた。

そしてそんな私は寺島と竹中の二人組に完璧に酔い潰されることにもなつた。

ある時寺島は「おーい、居るか」と上がり込んで来た。こういう時は頼み事がある時だ。「居るから上がり込んで来たんだらう」と難癖つけてみたいほどの時は、いやしばらくずっと重い気分に残っていた。

「竹中から連絡があつてデカパンの骨を分けてもらつてくれと言うんだ、あ、る、ん、だろ」竹中もおれも君なら立场上骨を持ちかえつてくれるはずだとふんだから頼みに来た、という。なるほど私は釜ヶ崎の救援対策を統括していた。彼の遺体の引き取り、検案は立场上の仕事だろう。しかし骨をお母さんから貰つたのは個人としての思いからであつて、釜ヶ崎と山谷のそれぞれ公園にでも埋めてやりたいと考へたからのことである。

寺島がしおらしく私に頼み込んでくるその姿が面白くて、じ

らしてやることにした。「確かにここにあるけど、量も少ないし竹中さんだということだけで渡すわけにはいかんですよ」

デカパンこと前記した鈴木国男は七六年二月一五日、大阪拘置所保護房で殺された。正確な言い方をするのなら、鈴木は圧倒的な力が加えられた痕跡が無数に残る体で、自殺ではない死に方をしたということだ。おまけに、司法解剖として内蔵すべてが摘出された空っぽの体で返されてきたのであつた。喉から下腹部まで切り裂かれ、荒縄のようなもので乱暴に縫合された体。脳も摘出され、お椀状に切り取られた頭蓋骨の痕跡を示す全周縫合という頭部の姿。もはや虐殺という言葉でしか形容できない死体の姿であつた。

こういう死の現実を前にして何ができるのか、また何を為すべきなのか考へることは重苦しいことだつた。

鈴木死は竹中にとって二人目のものであつた。八か月程前

の七五年六月二五日には、船本洲治が沖繩嘉手納基地東ゲート前でガソリンをかぶり自決を遂げていた。沖繩海洋博開催のため皇太子が来沖する直前のことであつた。(粉砕) (来沖阻止) が彼の死への道行きのスローガンとなつた。

立场上船本の遺体の確認、遺族の世話、おそらく現地で火葬せねばならないことも含めて私はカンパに託されて沖繩に発つた。船本の死に顔は意外にも奇麗なものであつた。

寺島の言うように船本の死は竹中に悪い病気をうつされた結果であるなどとは言うまい。彼は誇り高き革命家であつた。彼の死が鈴木と重なり、より一層私にとって重いものとなつていたのである。

鈴木は竹中とは因縁の深かつた男である。船本とは違い、折りにふれその交流は続いていたようだ。寺島の説明によれば、事件の少し前に鈴木が電話を掛

けて来て、これからフィリッピンに行くという竹中に同行を申し込みにせがんだのだという。竹中にしてみれば、あの時無理を聞いてやつておれば、という思いが当然あつて、近いうちにまた出向くらしくその時に違骨を現地に埋めてやりたい、というのだつた。また、寺島にもデカパンとの交流がいくつかあつて忘れがたい人物ではあつた。

寺島は常に「大きさ」を感じさせる人物であつたが、この時は友達の為にいじらしく頭を下げて、等身大で普通の人間にか見えなかつたことがかえつて寺島への親しみが増したような気がするのである。

これ以上じらすのは悪い気がして、軽くあやまつたうえで喉仏の骨を小割にしたひとつをチリ紙に包んで小さなタッパウエアに入れて竹中に託した。

秀が会いたしという 八時 署名があつてもなくてもこう

いうメモは寺島。場所は書いてなくても八兵衛。結局は出て来いということだ。

話を聞かせてほしいと竹中はいふ。素面で話せるようなものではないと答えると、寺島は「それもそうだ」とうなずいて、私の目の前にグラスをぽんと置き、一升びんでなみなみと酒を注いだ。

筋書きが違う。こういう場合は、まず和歌山産の天然真鯛の刺し身あたりと小鉢物が出てきて、「お疲れさん、ぼちぼちいこや、ママさん彼に熱燗でつけてあげて」というあたりが本筋であろうが。

かけつけ三杯、安上がりで手つ取り早い勝負に敵は出てきたもんだ。空きつ腹にこたえた。その日のその店での記憶はほとんど消えて、ない。竹中は期待した話ほとんど聞けなかつたであろう。わかっているのは、相当乱れて大泣きしてみんなの手を焼かせたという後日談を残したということだ。八兵衛のお

おかみは二人を叱つたという。いい大人が二人して若い子を泣かせて何が面白いかと。

しばらくして又竹中が会いたがつているから来いという。今度は竹中からのいきなりの話があつた。前回はすまなかつたという。ずつと気になつていて、私にあやまつておきたかつたのだといい、だから寺さんにたのんで来てもらったのだとも言つた。今日のここの支払いは俺が持つから遠慮なく呑んでくれ、ともいう。

寺島流に言えば「よせやい」である。かえつて気恥ずかしい思いがしたもんだ。間違いない筋道でうまい酒を呑んだのだと思う。細かな記憶はないが竹中も満足のいく話が私から聞けたはずである。豪放磊落に見えるが実は繊細な神経の持ち主で人の痛みがわかる人間。この時に私の竹中労の人物観と評価は定まつた。

真骨頂としてのおもしろがりかた

前田年昭

前号の文章に対して中岡から「何で寺島を『さん』付けにするのか」と言われたが、ぼくにはいまだに寺島が亡くなったという実感がないのが正直なところ、こればかりはしかたない。

さて、一七七三年、この年の春はコインロッカーへの捨て子という特異な事件が連続した。二月の東京・渋谷を皮切りに三月になって大阪でも、さらに各地で連続して報じられた。ウィ

キペディアによれば「この年だけで大都市のターミナル駅を中心に四三件」にものぼったというからただごとではない。とくに連続したのが、梅地下広場、地下鉄御堂筋線「梅田」駅改札前であちら阪神、こちらは阪急方面というメイン広場の脇を入ったところのコインロッカーだ。今はびかびかに磨き上げられた「通路」に二、三十人の野宿者がひっそりたたずむこ

の場所は、当時は汚れていたかもしれないぬが何しろ活気あふれる「広場」であった。あちこちの丸い柱には夕刊紙がベタベタと貼

られ、氣勢をあげる虎ファンやら道ならぬ恋の逢い引きやら、猥雑のなかで人びとの眼は確かに生きいきしていた。中国文化大革命の壁新聞へのぼくの共鳴には、意識下にこの梅地下の壁新聞が焼け付いてたからかもしれぬ。

前の年、行き倒れ死者の調査を呼びかけ、誰一人みとるものもないまま死んでいく人びとを悼み弔うために、ぼくは人民の葬儀社、人民公益社を立ち上げていた。連日の捨て子事件にこたえてこそ人民公益社ではないか、無事に育つて大人になってウサギ小屋のような団地というハコに住むのだからといって、産み落とされた赤ん坊にはコイン

ロッカーの金属のハコから逃げ出すすべはない。彼や彼女はただただハコの暗さと冷たさを感じ取るだけではないか。

ぼくは、コインロッカーの前で「子殺し案内」と題したビラをまきに行った。

やってるのがひとりだからくみやすしとみたのか、さつそく曾根崎警察から巡查ふたりが来た。無断でビラをまいたらイカンという。応対ののらりくらりのうち、通りすがりのおぼちゃんらがビラを受け取るやナンマイダブやらナンミョウホーレンゲキョーやら唱え出した。それだけではない。お経のカーセットテープを仕掛けた段ボール箱のなかに小銭を投げ込みはじめた、段ボール箱は賽銭箱になった。硬貨だけでなくお札も。こうなるもはやひとりではない、巡査退散、大阪のおぼちゃんたちは天下無敵である、痛快痛快。

上げかねる盛り上がり。段ボールのなかの金額はすでに釜ヶ崎での土方のいつもの日当を超え、にわか偽坊主？のぼくは何ともバツが悪くなり、千枚用意したビラがなくなつたのを潮にほうほうのていでお開きに。帰つてこの話をさつそく寺島さんにした。面白がること面白がること、身体を揺すつて状況を聞きたがる。この無邪気さ、頭の柔らかさが私は好きだったのだと今、しみじみ思う。目前で起こっていることを逃げずまっすぐ見つめつけ面白がる。ぼくは寺島さんの好奇心と調べ魔の原点をみた。

しばらくメシが食えるぞと恵ノリの寺島さん、文面を読み返しながら「無縁赤子追悼」とのコトバをみて「赤子と書いたら『天皇の赤子』。どつちかという」とやんわり一言。天皇制下の「臣民」「赤子」というときの「赤子」、ぼくはこの日もまた、寺島さんから闘いの言葉を楽しく学んだのだった。

情報BOX

★未登録の最新情報(雑誌)関連記事

①『群像』昭和26年6巻6号大木静雄「本と兄弟」

国立国会図マイクロフイツシユ

Y&O-120

②『初期社会主義研究』13号書評

「独自の叙述によってアナ・ダダ

の時代を現出ー寺島珠雄著『南

天堂ー松岡虎王鷹の大正・昭和」

大和田茂 大市中図

③『ちくま』345号(99/12)「南

天堂漂流(7)寺島珠雄さんのこ

とー松岡虎王鷹の『南天堂』森

まゆみ 岡県図

④『日本アナキズム運動人名事

典』編集委二ユース」

寄贈情報欄参照 個人他

⑤『REVUE』(リビエール・川、

流れ)発行所・堺市桃山台横田

英子方集団編集

10号(93/9)「伴勇詩集・出版

記念会及び偲ぶ会報告」(伴勇の

プロフィール)冒頭/寺島珠雄氏

14号(94/5)石村勇二「詩誌寸

評」交野が原35

22号(95/9)横田英子「詩誌紹

介」交野が原38

46号(99/9)横田英子「寺嶋珠

雄さんを偲んで」、永井ますみ

「編集ノート」

50号(00/5)記念号 正岡洋夫

「周荘のことなど」(寺島登場)

日本現代詩歌文学館

※事務局だより参照

★同(本)

①『全国詩人特選詩集』第三巻(83

〜7)近文社発行 寺島珠雄、他

粟田茂など全九名のアンソロ

ジー。「食う連作抄」最終「日記」

②橋本照高写真集『小野十三郎の

二日間』発行：澤標(99/11)

構成：倉橋健一 編集：中塚鞠

子他

寺島珠雄「或る日 小野さん」

「断崖のある風景」からの転載。

これは③アンソロジー等に

分類)

★追加情報(雑誌)

①A-12『大阪春秋』第33号(82

〜8)詩「夾竹桃の花咲けば」寺

島珠雄 大市中図

②A-104『仿書月刊』99年10月号

関連：「追悼・寺島珠雄さん」

帝人の居住地」伊藤信吉

鳥取県図

③A-176『日本古書通信』99年11

月号 関連：「霊と肉」と長

崎謙二郎のことー寺島珠雄氏追

悼にかえて」本地陽彦 福井県図

④A-35『柵』No.33(89/9)「凡

常なる悲鳴 小野十三郎詩集」い

まいるところ」余話」寺島珠雄

同 No.48(90/12)書評「京都を

押しつけない京都人の詩集「気

をおびる物たち」寺島珠雄

『柵』所蔵元は「永瀬清子資料

室」。清子の故郷である岡山県赤

警市熊山町松木にあり市教育委

員会の所轄。遺族から寄贈をう

けた膨大な図書雑誌が嚴重に保

管されていて、原則的に清子自

身の著作物のみが複写を許可さ

れる。それ以外のものはそれぞ

れの著作権者の複写許諾書が必

要であり、またはやその文章以

外の関連文章例えば寺島珠雄詩

集の書評等)や表紙・奥付など

も複写は不可となる。寺島珠雄

からの清子宛手紙一通、年賀状

四枚も所蔵されており、ここだ

けにしか無いものを最後の最後

に複写する予定である。

前号掲載提供情報の『陽』これ

は「ヨウ」ではなくて「ヒ」と

読む。「陽」が昇るの「ヒ」も

ここに所蔵されていたが欠号が

多く、引用されたものしか発見

寺島珠雄書誌目録刊行会叢書

I 『詩集 日野善太郎の詩』

II 『釜ヶ崎通信・別冊 まだ生きている』

★申し込みは寺島珠雄書誌目録刊行会事務局(中岡光次)まで

〒709-0812岡山県赤磐市沼田468-1 携帯080-5617-6669 ファクシミリ086-955-6261

ゆうちょ銀行振替口座 01300-5-55266(口座加入者名義 寺島珠雄書誌目録刊行会)

できなかった。調査継続。

★珍情報(収集漏れ)

◎A-68『地帯』No.29(68/11)に「黒木重雄」というペンネームで詩「記録」ありと山内清は書いてる。

詩集「金ヶ崎通信別冊・まだ生きてる」所載の詩(日付けは69/12)「記録」の原型か。「黒木重雄」などという、兄大木静雄を連想させるようなもつともらしくそれらしいペンネームを使った例は他にもあるかのだろうか？

推定年齢的に山内清氏お元氣の可能性は高い。よき後援者であつた竹島昌威知氏はすでに亡く、資料類は処分されてしまつたと聞く。山内氏の現在情報をお持ちの方おられませんか？

★新情報(今という時代に)

◎A-155として追加『ぼかん』02(11/11/20)

現在における最新の寺島珠雄に関連する雑誌です。「特集・私の大阪地図」これは寺島珠雄のその著書のタイトルから採られているが寺島特集ではない。しかし、「大阪にも寺島珠雄にもまつ

たく馴染みがない若者たちがこの本を呼んで、どんな風に感じるのか知りたいと思つた」という読書感想文「私の大阪地図」。

横並び83年生まれの三人がそれぞれ一頁ずつ記述している。評を書くことすれば、どうしても「ないものねだり」になりそうなのでそれは止める。執筆陣には扉野良人、加納成治の名が見える。それぞれ過去に寺島珠雄への思いを筆に託した人物である。

〒5600014 大阪市西区北堀江1-14-21 第一北堀江ビル4F 貸本喫茶ちようちよぼつこ内
ぼかん編集部 Email: pokan00@gmail.com 定価千円

感謝!

各氏からの資料提供報告と追加情報

☆川瀬健一氏(『詩と現実』編集発行人)

《雑誌》

A-43 『詩と現実』2号(70/11) 4号(71/12) 休刊号(74/12) A-13 『解水期』14号(81/6) 《その他》私信原稿用紙一枚、編集・投稿上の連絡)

以上寄贈

放送のこと

すべて新発見です

☆平山忠敬氏自由誌(『ゆう』発行人)

《本》

C-3 詩集『わがテロル考』日野善太郎から平山氏あて私信便箋二枚(はさみ込み有り)
C-12 詩集『酒食年表』
C-16 詩集『酒食年表第三』
C-28 『旅の宿りの長いまち』
C-30 『アナキズムのうちそとで』 以上寄贈
C-171 平山氏個人通信誌『いのしし』 複写物含む寄贈

《未登録》『日本アナキズム運動人名事典』編集委ニュース
欠号(創刊号。2・4・5・7・8)を除く全冊(随所に寺島関連文有り)

☆中西徹氏(浮游社)

《その他》寺島珠雄自製『色紙』 詩画展に使用か)

☆小沢信男氏

C-4 『詩集 ぼうふらのうた』 復刻版
C-8 『詩集 情況と感傷』(78/2号に西村修「寺島珠雄さんのこと」 3号に「寺島さんを悼む」詩「神戸備忘記」/日野善太郎「寺島ショック」/西村修「寺島さんのことII」/「たより・あ

の人この人」欄に各氏私信等有り 第6号日野善太郎「寺島珠雄と見たTV」これは74年2月末NHK兄静雄夫妻を扱う「70年代われらの世界・幸福の設計」

C-14 『詩集 酒食年表第二』(「謹呈」を自分で彫りました) という私信と二色刷自製謹呈葉付き)
C-16 『詩集 酒食年表第三』
C-17 『遠景と近状』
C-115 『通り過ぎた人々』小沢

信男

《雑誌》

A-16 『うえの』No.388(91/8)

同No.422(94/6)「外米と近

衛、細川」これ追加新発見です

A-20 『虚無思想研究』第16号・

追悼寺島珠雄

A-154 『ぶらつく通信』第〇号

(00/7)

A-163 『寺島珠雄 詩・エッセ

イ集』

《その他》

◎寺島珠雄個人通信『低人通信』

第二次19号〜42号(欠20号、22

号は手紙付)

◎『寺島珠雄名刺』(96/9/15記

月の輪書林高橋氏の紹介状)

☆長谷川修児氏『日本反政治詩

集と共著者・『遊撃』編集発行人

《本・未登録》

『遊撃詩集』(94/9)発行:さか

さのイシアンソロジー、詩「須

磨遊歩」所載)

《雑誌》

A-111 『遊撃』寺島珠雄関係分

バックナンバー

第25号(86/12)・194・196詩

『酒食年表』抄紹介・202詩「未

明のメモ」母の夢を見たという

詩掲載・203・207『詩集神戸備

忘記』の寄蔵をうけたことにつ

いて若干)・224・249(『吉本孝

一詩集』の寄蔵を受けて紹介二

頁半)・251(詩「月齢26・1の

朝)掲載)・289(「遊撃手」欄

「再生封筒―裏返し封筒―郵便

番号用のゴム印も含めて封筒の

作成マニュアル手紙・96/3/16

全文掲載)・296・310(詩「酒食

年表第三追録」掲載)・第25号

以上寄贈

〒1550032 東京都世田谷

区代沢24-13「さかさのイ

シ」長谷川修児 月刊・無

料 振替口座00170-3-31251)

☆たなかよしゆき氏『遊撃』)

《雑誌》

A-111-1 『遊撃』第316号(99

/12) ●寺島珠雄追悼号

復写寄贈

以上、遺漏誤記あればご指摘を。

探つもの、ハほればなし

事務局だより

◆「パンティ」岩手県北上市にある日本現代詩歌文学館に創刊号他八冊2号(8号は欠)の所蔵が確認。中岡の手抜き調査が原因でした。紹介は次号に。

◆「RWHEEL」リビエール)これは『伴勇作品集』を読んでその略年譜に出していた雑誌。伴勇の希望により別組織として発行されているがこれは事実上「月刊近文」の後継誌である。「片信録」に思いを寄せた一人として伴勇の詩を寺島は載せた。後継誌とはいえ必ずどこかで寺島珠雄は登場する。確信をもって、創刊号H四年五月)から一気の取り寄せをすることにした。お

その報告を受けた私は、ありがた

い申し出をただの申し出に終わら

せたくないと考え、発行地である

堺市立中央図書館との仲立ちをす

ることにしました。

◆12/9 東金市立東金図書館より電

話。調査を依頼していた鈴木勝個

人誌「ふるさと詩人」の閲読調査

が完了し、寺島珠雄の詩他十数篇

確認とのこと。表紙、奥付その他

も含めて複写送付をお願いした。

その電話を受け取ったのは、私も

図書館に電話をしようと思ってい

た時。当号に「寄贈」の呼びかけ

を載せたが、比較的順調に寄贈が

相次ぎ、重複本が何種類か出だし

た。とりあえず手元に置く必要の

ない、五冊を朝一番で発送した。

それで念の為の電話をいれておこ

うとしたところでした。その五冊

は次のとおり。

(1)詩集「情況と感傷」VAN書房(78/6)

(2)詩集『酒食年表第三』1998』エンパティ(98/4)

(3)『アナキズムのうちそとで』

わが詩人考』編集工房ノア(83

/5)

(4)『虚無思想研究16号』追悼寺

会計報告 (2011.10.10-2011.12.19)

《協賛金を頂いた各位》(受付順・敬称略)

松葉祥一・永井美由紀・河内紀・小沢信男・奥沢邦成・平山忠敬・村山恒夫・川田恒信・古屋淳二・富板敦・加名義泳逸・佐藤信子・真辺致真・岩本乾治・松本潤一郎・上村とし子・北村信隆・遠山幹男・小黒基司・中島敏・井内節子・猪野健治・長谷川修児・又重勝彦・松岡高・朝浩之・苗村昌義・坂井てい・他1名・(松繁逸夫・前田年昭・中岡光次)

◇収入

協賛金 (32名)	143,400円
叢書売上	2,000円
収入計	145,400円

◇支出

振替手数料	3,260円
振替用紙印刷サービス代	700円
会報1号発送費	2,880円
その他郵送通信費(切手、葉書等購入費含)	2,460円
複写料	27,720円
文具費 封筒	2,100円
ゴム印	11,400円
雑品 (スタンプ台、クリアファイル、 コピー用紙、複写用インク他)	6,313円
古書購入費(詩集『断景』、「CASCO」2号、 「雲遊天下」22号)	(計) 4,500円
支出計	61,333円

◇差引収支(繰越)

84,067円

●次号は来年二月下旬の予定。昔の記憶、とくに当事者の証言には思い込みや勘違いはよくあることかもしれません。遠慮なく寺島をめぐる思い出の投稿をお寄せください。

●暮れも押し詰まってからの発行となりました。年始のご挨拶は誠に勝手ながら本号をもって代えさせていただきます。皆様よいお年を。寒さの折、くれぐれもご自愛ください。

●電話番号を忘れずに。

※図書等を宅急便で送られる場合はできるだけ「黒ネコ」をご利用下さい。「着払い」でけっこうです。「着払い」の場合は

〒709-0812 岡山県赤磐市沼田 ヤマト運輸(株)赤磐ネオポリス営業所留 でお願います。会の電話番号を忘れずに。

島珠雄 (90/7)
(5)詩集『釜ヶ崎通信別冊・まだ生きている』複製版

これらは郷土資料室に永年保存されます。とりわけ(1)の『情況と感傷』は「小沢信男様寺島珠雄」署名入りで貴重なものです。図書館HPでの宣伝をお願いしています。

「奇縁」というべきでしょうか。通常の業務の範囲を越えて「ふるさと詩人」の網羅的調査を請けて頂

「目録」第一次の未送付など、遺漏があるかもしれないという不安があります。おかしいと思われる場合は、遠慮なくご連絡を。即返事を心がけてはおりますが、払い込み

「事務処理の方法に未だおぼつかないものがあり、「会報」の未着、

「目録」第一の未送付など、遺漏があるかもしれないという不安があります。おかしいと思われる場合は、遠慮なくご連絡を。即返事を心がけてはおりますが、払い込み

きました。感謝。これからも宜しく。みから当会への通知は最短で三日、土日が挟まると一週間近くかかっております。ご考慮下さい。

送金される場合は、払込取扱票の通信欄に、入会の契機なりを一言記入していただけると助かります。各位のご協力については公開を原則としますので、匿名を希望される方は明記を。